**題「雨つ通ひ路」**

脚本案まとめ

**原案「公達（きんだち）に狐化けたり宵の春」（与謝蕪村句）より**

**「春の宵はものの形も音も、ぼうっとかすんで、やわらかく呼吸しているようだ。湿気の多い風土の一特徴だが明るくも暗くもない、えもいわれぬ光が充満している中から、何が動き出すか。」（高橋順子、P12引用）**

「狐」が醸し出す妖しくも幻想的な雰囲気に包まれた祠。

古森の中朧灯りのもと、今宵もたちが舞い踊る――

《OP》

赤い雨傘をさした一人の男が、色のない、蠢く雑踏の中にある人の面影を追い求めて立ち尽くしている。（EDと同一空間）男は、じっとこちらを見つめ、まなざしを残して去る。

《転換》

* 森の中を惑いながら茂みを掻き分ける視点――燈籠にぽっ、ぽっと妖しげな明りがともる(映像的に可能であれば)
* 道が開けると、そこは古森の中の御社。そこに二対の駒狐の石像が建っている。スクリーンには石の駒狐のシルエットが映し出される。ダンサーはそのシルエットの中に重なって立つ（狐らしいポーズをとっていていただければ）。徐々に雲間から月の光が差し込み、あたりが明るくなり始め――シルエットが溶けだし、呪縛が解かれ、駒狐が動き出す――(コフレ公演のOPをイメージしていただければ良いかと。)
* 男女の妖狐が舞い踊る月下のデュオ。どちらかというと、気が強く自己主張が多いのは女狐のほう。男狐は女狐に迎合している感がある。あやかしの世界に物足りなさを感じながらも、男狐は自分の世界から踏み出せずにいる。
* そこに、一人の人間が迷い込んでしまい、妖狐たちはその少女を莫迦そうとするものの、少女に逃げられてしまう。自分の生きる世界に囚われていた男狐であったが月影に照らし出された少女の後ろ姿が彼に外へと踏み出すきっかけを与える。
* 月の光が雲間に閉ざされる頃、妖狐は駒狐の像に戻らなければならない。女狐は何の疑いもなく石に戻るが、それを見計らって男狐は人間の姿に化け少女の影を追い街に出る。

《転換》

* 衝動に身を任せたまま、大都会に飛び込んだ男狐。しかし雑踏の中に彼女の影を見失ってしまい、人間に化けた狐は大都会のなかに独り放りだされる。風と木々のざわめきだけに包まれた仄暗い森の中とは一転、男狐は音や光の洪水に呑まれていく。

めまぐるしい雑踏。喧騒の渦。

始めはのうちは、初めて見る世界に興味津津だった男狐も、次第に心を蝕まれていく。

追い打ちをかけるように雨が降り始め、彼はどうしたらいいのかわからないまま蹲る。

そんな途方に暮れている彼のもとに、赤い傘をさした一人の人間が歩み寄ってくる。

差し出された傘のもとから現れたのは、あのときの少女だった。

（周囲の雑踏はモノクロで、少女の差し出す傘だけがポイントカラーで赤。）

（スクリーンに映るのは俯瞰から見た図で水たまり。水たまりには初め蹲っていた男狐の姿だけが映っている。そこにすっと赤い傘が入ってきて、見上げると少女の姿。

この一連を舞台上のダンサーの動きとシンクロさせられたら劇的な出会いを演出できるのでは。）

* 少女は人間に化けた狐の手を引き、人間の世界を見せてくれる。初めは戸惑う男狐だが、少女の瞳に映る世界は純真さと希望に満ちていて、人間界ってわるくないじゃないか、彼女と一緒に俺も日のもとで生きていけたら・・・なんて思い始める男狐。

（コフレきらら作品の後半のほうをイメージしていただければ。）

少女も彼と出逢い、大人の男性に恋をすることで少しずつ成長する姿を見せ始める。

* 少女に惹かれていく男狐ですが、そこに現れる女狐（人間の姿）。女狐に住む世界の違いを叱責するように諭され（女狐は男狐が少女に惹かれていくのが気が気でない。そんな二匹のすれ違いというか葛藤みたいな姿をデュオで表現したい）、女狐は彼が狐であるということを少女に明かしてしまう。

（このばれてしまうシーンですが、人間に化けた男狐は青いストールを巻いていて、これを解いてしまうと狐に戻ってしまう、という設定で、彼が女狐を振り払い少女に寄り添おうとする瞬間に、女狐が後ろからそのストールをばっ！っと引いて解いてしまう→瞬間スクリーンに狐のシルエットが映し出される、という場面はどうでしょうか？）

* 別れ際のデュオ。(少女と男狐)

　真実に心揺れ動きながらも、それでもあなたをすきでいられる、と寄り添おうとする少女。しかし彼は自分が少女のそばにいることで、妖の瘴気にあて彼女を穢してしまうことを懼れ、心が引き裂かれるような思いを隠し別れを決める。

(参考までに、「オペラ座の怪人」のファントムとクリスティーヌのデュエット「Music of the night」のイメージ。<http://www.youtube.com/watch?v=ZZFNxSk-V0o&feature=related>

男狐は少女と心が通い合い始めたことに喜びを感じる一方、彼女が妖艶さを増していくことを懼れていて、寄り添いたいけど寄り添えない。)

* 別れのシーン（少しきららちゃんと話していたのですが、）

妖の世界に還ることを決めた男狐。彼は首に巻いた青いストールを、永遠の契りのように彼女の腕に結び付け、去っていく。

（ストールを解くということは人間の姿でいるための妖力を失うということだから、その呪文を解いて狐の姿に戻っても、あなたを思い続けています、という意味を込めたシーンにしたい）

《転換》

雨の日の雑踏の中(OPシーンを少女視点から)

色褪せたモノクロの人ごみの中に、赤い傘が覗く

ただの偶然かもしれない、あれはただ、赤い傘をもった別の人かもしれない

だけどあの時のようにか細い雨が降る日には、どこかであの人が私を見守っていてくれるような気がする。まるで愛しい人を引き止めようとするかのように、今日も静かに雨は降る――。